

アメリカ留学体験レポート

情報文化学科 2年 浅間一元

アメリカ留学は私にとって、多くを学んだものだったと思われる。異文化を体験し、英語を学ぶ楽しさや意義を改めて実感した。本レポートでは私が体験した異文化について、実際のエピソードやその時の感情を踏まえて論じたい。

私は、国際交流インストラクターで異文化について少し学んだので、留学の前から異文化を体験したいと思っていた。なので、様々な国の人々に積極的に話しかけ、その人たちの文化を学んだ。例えば、中国では食事を終える時テーブルに縦に箸を置く。ブラジルの人と話す距離は、手を伸ばしたぐらいの距離。アメリカ人は頻繁に教会に行き、神の言葉を学びお祈りをする。これらの事は日本では体験できないことであったため、異文化への興味がより深まった。

だが、ある日、学校から徒歩40分のスーパーに行きたかったので、バス停でバスを待っていたら、数人のインド人が私の順番を無視して割り込んできた。最初はその行為に腹が立ち、なぜ割り込むのか訊こうと思った。だが、彼らは私の話を聞かず、バスもすぐ出発したため、結局理由を訊くチャンスを逃した。その日は、バスに乗れなかったため、スーパーに行くことができなかった。一週間後、今度こそと思い、バスを待っていたら、また前回とは違う数人のインド人が順番を割り込んだ。また、話を訊こうとしたが、彼らはこちらの話に耳を傾けず、バスに乗っていった。このことに私は本当に腹が立ち、許そうとも思わなかった。あまりにも腹が立ったため、中国人の友達にこのことを話した。実は彼も私と同じ経験を何度もしていた。そして、頭を冷やし冷静に考えたら、人口の多いインドでは電車やバスに定員以上の人が乗ることが当たり前で、そのことで、バスや電車に関しては順番を待つということがないのではないかと思った。冷静に考えれば理解できることかもしれないのに、私は「割り込みをされた」という怒りで異文化理解を自分から遮断してしまったのだ。このことから、私自身の異文化への捉え方が変わった。異文化には、受け入れやすいものや、楽しく体験できるものもあるが、自分にとって衝撃的で、受け入れがたいものもある。だが、たとえ他の文化が受け入れがたいものであっても、その場の感情で受け入れることを止めることは、分かり合える可能性を自ら潰すということだと学んだ。私はこの異文化の衝突から、異文化を学ぶことの楽しさを、“違い”の面白さを学んだ。